

救助の仕事がないときは 何をしているのかな？

消防署に入署すると、まず消防学校（岩城町）において、六カ月間寮生活をしながら「初任科」を勉強するそうです。これは消防マンとしての基本ライオンといったところでしょうか。消防学校を終えてからの配属後の勤務は、二十四時間の隔日勤務だそうです。もちろん労働時間は調整しているようですが、それにしても、二十四時間とは頭の下がる思いです。夜だって仮眠程度でしょうし……。

現在、救助隊員は隊長一人、副隊長五人を含む二十四人で編成されています。



す。ただ有事を待つのではなく、普段からいろいろ訓練を行っているようです。日常勤務として、毎日朝と夕方に全車を対象に十五から二十分ぐらいエンジンをかけて、始業点検、器具点検を。また、週に一回は試運転をするそうです。年に何回かの訓練としては、「器具・器材の点検、使い方」（毎月）、「車からの救出訓練」、「水難救助訓練」、「訓練塔での降下、とはん訓練」、「地下、トンネルからの救出訓練」、「ほふく訓練」などです。訓練ではないのですが、そのほかに「玉掛技能」、「小型移動式クレーン」、「ガス溶接技能」、「潜水士」、「小型船舶（四級）」などの技能・資格取得のための講習会への参加などもあるようです。

実地訓練

その厳しき、真剣さに感服

事故車からの救出訓練

十月初旬に行われた実際の訓練を見学させてもらいました。最初に交通事故を想定した車からの救出訓練の現場に行きました。車がつぶれて、自力で脱出できない人を救出する訓練です。スプレッターとカッターという器具を使い、ドアを車から切り離したり、屋根を押し開いたりします。また、運転席で身動きできない人を想定し、角材やチェーンを使ってダッシュボードごとハンドルを起こし、すき間を作る訓練もしていました。

この訓練の目的は、器具を使うときの力の入れかたや、どこを開くか、どこを切るかといった技術的な面。それとともに大事なことは、冷静沈着に素早い行動が取れるように。また、人が閉じ込められているので、痛みや不安をなるべく与えないように、慎重にしかも励ましなが作業できるように、といった面もあるそうです。

水難救助訓練

次は、下内川の松峰橋付近での水難救助訓練の現場です。潜水訓練では、ウエットスーツを着て、ボンベ一式（約三十キログラム）を背負い、川に入りましたが、私は泳げないので、ただただ尊敬するのみです。パディというのですが、二人で組んで「水面を泳ぐ」、「コンパスを見ないで潜水」、「コンパスを使って潜水」など、いろいろな設定で訓練していました。水の中はとても孤独だそうです。だから、お互いに合図をし合えるような訓練もするそうです。ただ、組むといっても体はつながないそうです。それは、一人に何かあったときに、もう一人まで巻き込んでしまうからです。国家試験の潜水士の資格を持っている隊員は、取材時で九人でした。そのほは全員が二十代という圧倒的な若さを誇っています。訓練とは別に、基礎体力を付け



救助隊は 遊んでた方がいい

るため走ったり、夏になればよくプールで泳いだりするそうです。

これらの取材を通して感じたことは、私たち市民の背後を守るやさしさと、火事が無くても遊んでいるのではないということでした。また、私の文章力では、この感動を思うように伝えられないくやしきも感じました。

最後に、ある隊員の言った忘れられない言葉を紹介して終わります。「訓練は訓練で終わった方がいいですよ。火事も事故も何もねえ。大館が平和だっただけだから」